

(影印) いしこみつてる (石河光熙)

『いつらのこゑのかむがへ』——ある音義派の仮名専用運動

岡田一祐

要旨

本稿では、明治二十年前後の国語国字改良運動のうち、仮名文字専用運動のなかでも見過ごされてきた音義派の活動の一端について紹介したい。いしこみつてる(石河光熙)の『いつらのこゑのかむがへ』(二八八六)は、仮名文字専用運動の一大組織かなのくわいでは圧倒的少数派であった音義派の声を伝えるものとして貴重である。貴重な資料を影印するとともに、かなのくわいにおける音義派の位置づけを検討しつつ、本書をかなのくわい史にどのように据えるべきか検討する。

一、はじめに

本稿では、明治二十年前後の国語国字改良運動のうち、仮名文字専用運動のなかでも見過ごされてきた音義派の活動の一端について紹介したい。

二、書誌と梗概

影印するのはつぎの書物である。

『いつらのこゑのかむがへ』(東京大学文学部国語研究室蔵、請求番号S5:3)

表紙・扉 「いしこみつてるあらはす／いつらのこゑのかむがへ／かなのくわい」

内題 「いつらのこゑのかむがへ　みののくに　いしこのみつてるあらはす」

奥付 「明治十九年六月九日出版御届／同年七月出版(定価金八錢)

編集兼出版人 岐阜県士族 石河光熙 美濃国中島郡駒塚村

かなのくわい印刷所 常磐木活版所 東京日本橋区本石町一丁目

発売所 美濃国岐阜 三浦源助

同大垣 岡安慶助

尾張国名古屋本町 栗田東平

東京本町三丁目 みづほや

同本石町一丁目 ときはや^一

成立については、『かなしんぶん』第二十四号（かなのくわいものとも、明治十九年六月）に常盤屋・瑞穂屋の連名の巻末広告で

いつらのこゑのかむがへ

みぎは五十ゐんのあやまりをたゞし。おのれのみこみをかきのべたるほんなり、いましゆつばんにとりかゝりゐたればこのつきのうちには、うりいだすべし、

とあることから、自費出版の態ではありつつ、これら二書肆の関与が考えられるところである。

東京大学文学部国語研究室には、かなのくわいに広く関与した大槻文彦の養嗣子、大槻茂雄氏を通じて死後の昭和三年十月に寄附された。現所蔵機関以外の蔵書印は見当たらない。文彦がかなのくわいの事務を取り仕切っていた関係で手元にあつたようで、早稲田大学附属図書館洋学文庫にある「かなのくわいの書類」にその記載が見える。⁽¹⁾

その梗概は、五十音の完備性を説きつつ、ヤ行のイ・エ、ワ行のウに仮名がないのを不審であるとし、平田篤胤の「ひふみのしるべぶみ」(『神字日文伝』か)を引き、本書によって本来は仮名があるべきことが分るとする。さらに、その三字の本来あるべきかたちを推し量り、ア行の片仮名に近いものと定める。日文にしたがつて母韻と父韻を並べ、

ア行から順に声の出方を観察し論ずる。音変化に伴って、単純な母韻と父韻の和合では現代語音は導かれなくなっているようなところについては、上代では正しかったのだと論ずる。最後に、五十音それぞれの音、とりわけア・ヤ・ワ行のイ・ウ・エ段音の正しい発音を詳説して終わる。目新しいことが論じられているわけではないが、音声観察には地方色も感じられ興味深いところである。

このように、本書の内容は仮名文字専用運動を主張する本ではないということも興味深い。仮名の正しい音、ひいては正しい意味を取り戻すことが重要なのであって、書き表すうえで漢字を用いるかいは論じられてさえないのである。

三、石河光熙と石河家

石河家は、もと石川と書き、大和源氏の後裔を称する。戦国期に石川光元が豊臣秀吉に仕えたのを皮切りに、石川光忠は徳川家康に仕え、一万石以上の所領を与えられ、そのち尾張藩主徳川義直の附属を命ぜられる。その子正光以来、尾張藩年寄役(家老)を世襲する。美濃国中島郡駒塚村に屋敷を構えた。幕末の当主光晃は、維新後官位を返上し領地を献上するも、爵位請願運動を繰り返すが、認められるところとならなかった。その子光熙の代におよんでも運動を続け、明治三十三年になってついに男爵に叙される⁽²⁾。

石河家は文事にも積極的であったようで、名古屋美術倶楽部において大正六・十四年および昭和十年の三回の売り立てが行われている⁽³⁾。光熙はかなのくわいものとともに明治十八年十月に入会(「かなしんぶん」第九号、新入会員姓名欄)、機関誌『かなのてかがみ』には「しかをし」とよぶのろん⁽⁴⁾(第七号、明治二十年)、「あきなすびよめにくは

すなといふことわざのこたへ」(同、やまざきさとひらと共著)に寄稿したのが確認されるが、それ以前、それ以後に国学・仮名文字運動において目立った活動を見いだすことはできない。かなのくわい機関誌にもしばしば広告を出していた大八洲学会雑誌に文事に係わる記事を明治二十年から二十七年にかけて数点ものしており、このころは興味を持っていたのかと思われる。

当時の尾張徳川家当主の徳川義礼がかなのくわいに関係し、明治二十一年に名誉会員に選ばれていることも光熙入会と無関係ではなかるうが、くわいことはよく分らない。かなのくわいでは、岐阜・名古屋に支部があり、それに盛んであったと思われるが、記録があまり残されておらず、関係のあるなしすら分らない。

四、出版関係者

印刷所の常磐木活版所は、住所から見て、発売所にある常磐屋の活版部門であろう。常磐屋は、ときはやのあるじ『はりまめぐりひざくりげ』(金泉堂、明治十九年。国立国会図書館蔵)によれば、東京府土族の幸田勝三であるとのことである。のちに述べる瑞穂屋ともどもかなのくわいに縁の深い書肆で、『かなのてかぢみ』などに『ゑいりかなしんぶん』の発行所として広告を出しているのが見えるほか、明治二十一年には常磐橋活版所として佐々木建彦『カナアハセ』(国立国会図書館蔵)を印刷しているのが確認される。この『カナアハセ』なる書も、「カズカナ」なる音義派的な新字説を提唱するもので、幸田がこの方面と繋がり有していた証であろう。

岐阜の三浦は教科書翻刻などから業をはじめた一般の書肆で、商号は成美堂。その東京支店は現在の河出書房に連なるという。石河家の旧領中島郡駒塚は三浦の出身地羽栗郡笠松にほど近く、交渉があつても不思議ではないが、徳

川林政史研究所蔵の石河家文書には見えない。⁽⁵⁾

名古屋の栗田は慶雲堂万屋東平として文化年間から明治末年まで営業していた名古屋の書肆である。尾張藩時代の関係から交渉があつたものであろうか、とくに明確な関係は三浦同様に管見に入らない。

みづほやは、瑞穂屋卯三郎こと清水卯三郎である。かなのくわいにも古くから係わつていた開明実業家と呼ばれる一団の一人である。かなのくわい関係ではうさおと記すものをまま見るが、後代の伝ではうさぶろうとすることが多い。

六、かなのくわいにおける音義派

かなのくわいには、音義派がいたことは従来あまり注目されていない。音義派については、古田東朔氏の論があるが、母韻と父韻には意味があつて、五十音図はその意味の組合せを示して自然な音はすべてここに発すると考える一派である。『いつらのこゑのかむがへ』がこの思想と軌を一にするのはあきらかである。また、かなのくわいにおいて「いつらのこゑ」という名はすでに出ている。

いつらのこゑは、明治十六年にいろはくわい・いろはぶんくわい・かなのともとともに仮名文字専用運動の合同組織かなのくわいをなした団体の一つである。かなのともが由来となつてつきのぶをなし、いろはくわい・いろはぶんくわいがゆきのぶ、いつらのこゑがはなのぶをなした。その分け方については、

第四条 会中二月雪花ノ三部ヲ置ク月ノ部ニテハテニハ仮名遣ヒヲバ従来ノ格ニ従ヒテ記サントシ雪ノ部ニテハ従

来ノテニハ仮名遣ヒヲ改ムル所アリテ記サントシ花ノ部ニテハ五十音ノ原ヲ正シクシ仮名文字ノ数ヲ増サントス
但初ハ三部ニ分チテ各其道ヲ研究スト雖モ後ニハ一ツニ合ハスベキ見込ナリ⁽⁷⁾

として、目的に寄つて分けたものとする。はなのぶの目的とするところは、まさに音義派的であること一見してあきらかである。なお、これについて、日下部は、

「かなのくわい」の規則には、「はなのぶは五十音の原を正しくし、仮名文字の数を増さうとする」とあるが、他の二部に対する中立と調停のため、肥田浜五郎氏らの設けたものだと聞いた。⁽⁸⁾

という伝聞を伝えるが、無理やりいつらのこゑを組み込んだということであろうか。肥州小城藩の蘭方医で、かなのくわいつきのぶ編輯掛も務めた宮崎素庵は、かなのくわいの三部を回顧し、三部合併を論ずるなかで、はなのぶのひとびとをこのように称している。

（たゞしはなのぶはもとのいつらのこゑにして、そのしゆいは、五十おんのおんゐんをたゞし、かなもじのかずをもまさんとするまでのことにて、そのひとかずも、わづかに十にんにもたらぬくらゐなれば、もとより、つきのみ、ゆきのぶなどとかたをならぶるにたらざるのみならず、そのしゆいは、いづれのぶにても、とりしらぶべきことにして、はじめより、ひとつになりがたきだうりはあるまじとおもへば、これより、しもにははなのぶのことは、はぶきていはず。⁽⁹⁾

すなわち、はなのぶはきわめて少数派であつて、かつ、ゆき・つき両部の対立軸とは離れたところに目的があり、吸収してしまつてもかまわないというのである(どの部でも同様の検討をすべきという一節には、音義派と言語研究の違いが分明でなかつた時代を思わせる)。じつさい、三部合同が崩れて再分裂したときに、はなのぶは復興しなかつた。かなのくわい関連の刊行物が『かなのてかぢみ』にまとめられたとき、⁽¹⁰⁾はなのぶの刊行物はひとつも載つていないことから、もともとあまり大規模な活動をしていなかったということが分る(つきのぶ・ゆきのぶはそれぞれ数千人の会員を抱えていた)。

したがつて、はなのぶと『いつらのこゑのかむがへ』を直接結びつけることは難しい。しかしながら、「かなのしよもつ」には、『いつらのこゑのかむがへ』が挙げられており、まったく無関係のものとして見做すこともできない。石河光熙はもとのとも時代の会員で(もとのともはつきのぶ系)、はなのぶ在籍の経験はおそらくなかつたものと思われるが、ゆきのぶ系のかきかたかいりやうぶよりは、もとのとものほうがはなのぶには親和性は高かつたであらう。じつさい、つきのぶからもとのともにかけて、音義派的国学者の物集高見も在籍していたのである。

けつきよくのところが、なぜ石河光熙というひとがこの書物を出したのかをあきらかにすることができないが、それ以外の環境は、この書物の存在をけして不思議なものとはさせないのである。

七、おわりに

以上、本書のかなのくわい史上の価値について検討をしてきた。本書の内容が、かなのくわいはなのぶの標榜するところと大きく隔たらないということから見直したとき、本書が仮名文字専用運動を主張する本ではないという

点が興味深い。仮名の正しい音、ひいては正しい意味を取り戻すことが重要なのであって、書き表すうえで漢字を用いるかいなかは論じられてさえない。すなわち、はなのぶとの係わり如何を越えて、音義派は、かなのくわいに入れるようなひとびとはなかったのである。

本稿において、石河光熙という著者と本書のかかわりや、本書を音義派内の系統関係のどこに位置づけるかなどといったことには及ぶことができなかったことは課題であつて、さらに検討せられねばならない。

【注】

(1) 大槻茂雄 「かなのくわいの書類」昭和十年調。請求記号「文庫08 A0317」。この目録は、日下部重太郎が昭和十年に大槻茂雄を訪らいかなのくわい関係の文献を譲渡したことに関係するらしい数葉が綴じ込まれているが、日下部の著書に関係する記述は見えず、詳細は分らない。昭和三年に寄贈された本がなぜ七年後の目録にまだ残っているのかも不明とせざるを得ない。

(2) 松田敬之『華族爵位 請願人名辞典』（吉川弘文館、二〇一五）の「石河光晃」および「石河光熙」。

(3) 東京美術倶楽部『美術商の百年 東京美術倶楽部百年史』東京美術倶楽部・東京美術商協同組合、二〇〇六。昭和十年の売り立てでは、御胴丸紫濃緞が二千五百円の価格で落札されたという（七四二ページ）。

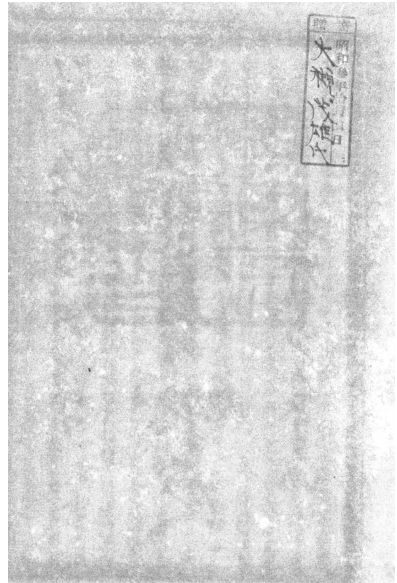
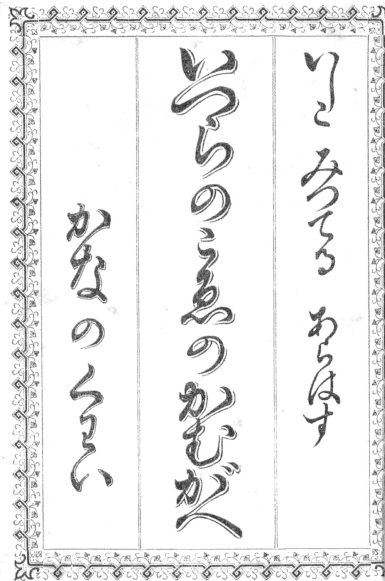
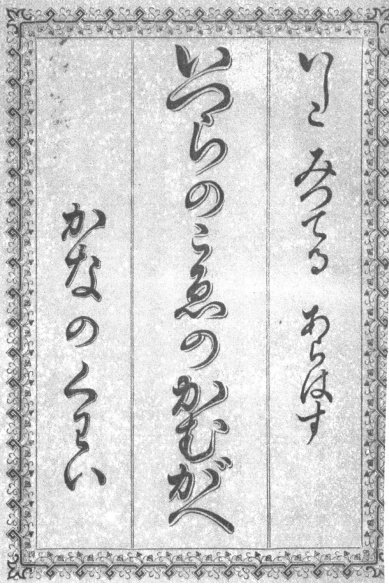
(4) 「くわいのしらせ」『かなのてかぐみ』二十二（一八八八）、一ページ。

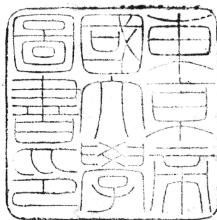
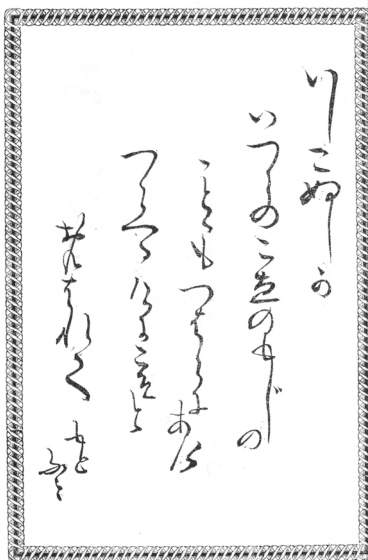
(5) 『徳川林政史研究所研究紀要』三九、四一―四八、『金鯰叢書』四三―四四に目録を分載。

(6) 古田東朔「音義派」「五十音図」「かなづかい」の採用と廃止、一九七八。『古田東朔近現代日本語生成史コレクション』（巻四、くろしお出版、二〇一〇）に再録。

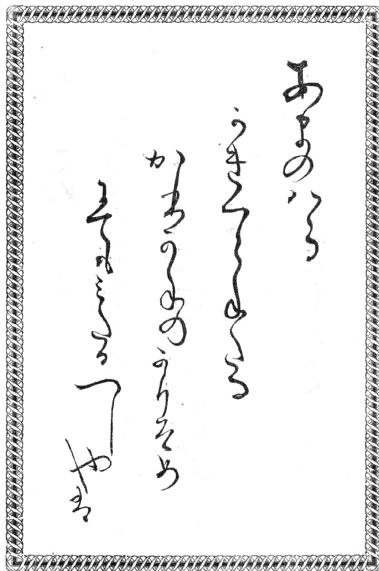
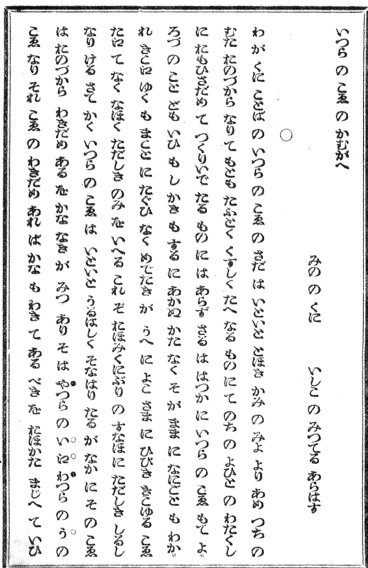
- (7) 「かなのくわいのなりたち」『かなのまなび』一 (二八八三)、一ページに掲載されたものによる。下線は原文通り。仮名・漢字の字体は改めた。合拗音促音を示す記号や分ち書きは反映させていない。以下同じ。
- (8) 日下部重太郎『現代国語精説』中文館書店 (一九三三)、三〇ページ。
- (9) 「みやざきうぢのえんぜつ」『かなのみちびき』十一 (二八八四)、二二ページ。
- (10) 「かなのしよもつ」『かなのてかぐみ』一 (二八八六)、一七一九ページ。

附記 『いつらのこゑのかむがへ』の調査・影印に際しては、東京大学文学部国語研究室のご許可とご厚誼とを忝うした。このほかにも、多数の機関の所蔵資料を利用するを得た。記して感謝申し上げます。





L 22186



かなのうまゝに
 なナハ
 奈 スア
 にニリ
 仁 スイ
 ぬヌル
 奴 スカ
 ねネリ
 根 奈 スエ
 のノリ
 乃 スオ

かなのうまゝに
 なナハ
 にニリ
 ぬヌル
 ねネリ
 のノリ

十一

かなのうまゝに
 はハハ
 波 ハ フア
 ひヒヒ
 比 ヒ ブイ
 ふフフ
 不 フウ
 へヘヘ
 へ フエ
 ほホホ
 保 フオ

かなのうまゝに
 はハハ
 ひヒヒ
 ふフフ
 へヘヘ
 ほホホ

十一

かなのうまゝに
 やヤハ
 也 ヨエア
 いイリ
 以 ヨイ
 ゆユル
 由 ヨウ
 江エリ
 江 延 ヨエ
 よヨリ
 與 ヨオ

かなのうまゝに
 やヤハ
 いイリ
 ゆユル
 江エリ
 よヨリ

十二

かなのうまゝに
 わワハ
 和 ヨア
 るルリ
 利 ルイ
 うウル
 留 流 ルウ
 ゑエリ
 禮 ルエ
 をヲリ
 世 守 ヨオ

かなのうまゝに
 わワハ
 るルリ
 うウル
 ゑエリ
 をヲリ

十三

明治十九年六月九日出版御届
同 七月 出版

定價金八錢

編輯兼出版人 岐阜縣士族
石河光熙

美濃國中島郡駒塚村

東京日本橋區本石町壹丁目

かなのくわい印刷所

常磐木活版所

美濃國岐阜

同 大垣

尾張國名古屋本町

東京本町三丁目

同 本石町一丁目

發賣所

三浦源助
岡安慶助
栗田東平
みづほや
とよ

(Facsimile) *Itsura no koe no kangae* by Ishiko Mitsuteru: An
Ongi-ha advocate in the kana-only writing system movement
OKADA, KAZUHIRO

In this article, we will introduce some aspect of the activities of the Ongi-ha, or phonosemantic school — an actor that has been overlooked within the kana-only writing system movement during the Japanese language and script reform movements around Meiji 20 (1887). The Ongi-ha school, who adopted the idea that Japanese words consist of the meaning of each sound, had little, if not nothing, presence in the kana-only writing movement. *Itsura no koe no kangae* (1886) by Ishiko Mitsuteru is invaluable in that we can find in it the voice of the Ongi-ha school as an overwhelming minor group among the *Kana-no-kwai*, the largest union in the kana-only writing system movement. By reproducing this valuable material in facsimile, we will discuss how this little book can be placed in the history of the Kana-no-kwai, considering the position of the Ongi-ha school in the Kana-no-kwai.